

チエレステ

岐阜聖徳学園高校 3年 真鍋 容子

戦隊もののヒーローになりたいとか、プリンをおなかいっぱい食べたいとか、子供の頃の小さな夢や願望というものは、大人になると、どうしてもよくなっていることが多い。「へんつしんつ！」と声を張り、腕を掲げている大人は、ごくごく一部の俳優か声優かスタントマンだけだろうし、プリンを十個食べると、数分後にはそのすべてを便器の中にぶちまけることになる那么容易に想像できる。

ワクワクやドキドキは、大人になるにつれ少なくなっていくものだ。

だけど、たまたま入った「サイクルあらみね」に置いてあったその空色の自転車の前で、私が感じたものは、ランドセルを背負った少女が感じた衝動と変わってはいなかった。

小学生の頃、毎朝すれ違う近所のお兄さんがいた。大学生だった彼は、晴れた日にはカメラオンのように空と同化してしまうのではないかと思うほどの美しい青色の自転車に乗り、小学校で配られる黄色のかぼちゃのようなものとは全く違う、流線型のかっこいいヘルメットをかぶっていた。

なぜか私はその自転車に心奪われた。

一度だけ親に、その自転車を誕生日プレゼントにねだったことがある。

しかし、父親は困った顔をして「お前には似合わない。」と言った。代わりに、当時人気のあった子供向けファッションブランドバッグを買ってもらった。それもかなり欲しかったから、私は満足し、空色の自転車が欲しかったことなんて、忘れてしまっていた。

どうして両親が買ってくれなかったのか。その理由は値札を見てすぐにわかった。自転車と一口にいっても、ホームセンターに売っている数万円のママチャリだけではないのだ。

1、2、6と数字が続き、コマを挟んでゼロ三つ。生活費が月三万の仕送りと、週四日の居酒屋のバイトだけの大学生には、ましてや小学生の誕生日プレゼントには高すぎる。

「お嬢ちゃん、ロードバイクやるの?」

自転車の前で動かなくなっていた私に気が付いたおじさんが近づいてきた。名札には「店長」

と書かれている。

私は店長に声を掛けられたことで、フレームの細いこの自転車をロードバイクと呼ぶのだと知った。

ロードバイク、と口の中でつぶやいた。それは、それまで母親のことをママと呼んでいた子供が、初めてお母さんと呼んだ時のような、少しのくすぐったさがあった。

「いえ。でも表からこのロードバイクが見えて、つい。昔、欲しかったんです、これ。」

本当は今も欲しい。今すぐにも欲しい。

「でも、私を買うには高すぎます。」

「だったら、お金を貯めてまた来なさい。」

店長は至極当然のことを言った。

子供の頃に比べ、夢や希望を持つことは減ったけど、叶えられるものは少し増えたのかもしれない。

サークルの新生コンパを断り、クラスの女子に誘われた、田舎者が誰でも夢見る東京でのショッピングを断った。二ヶ月の間、外食をやめ、節電・節水を徹底した。その間、空色の自転車、売れてしまわないかと心配で毎日「サイクルあらみね」に足を運ぶ私のために、店長は笑いながら在庫を確保しておいてくれた。

念願叶って手に入れたロードバイクは、いつでも私と一緒に（盗難には相当気を使う必要がある）。主に元々電車で三駅だった大学へ通うのに使われている。

ちょっとした坂道を上り、平地に出た。ガチャンとリアギアを小さいものに切り替えた。その瞬間、スッコンとペダルが軽くなった。クルクルペダルを回すが、空回りするだけだった。路肩に寄って、ロードバイクから降りる。

やってしまった、と思った。

昨日、山へヒルクライムに行き、滅多にチェンジしないフロントギアを小さいものに切り替えた。それを元に戻すのを忘れてフロントギアが小さいまま、リアギアをチェンジしたため、チェーンが余って外れてしまったのだ。

地べたに座り込み、だらしなく垂れたチェーンとにらめっこをする羽目になった。

あらかたのパンク修理は練習しておいたものの、チェーンの扱いには慣れていなかった。

「あの、直しましょうか？」

いきなり頭上から声がした。私は、斜め上を見るように振り返った。

片手で空色のロードバイクを押し、ストリームラインを描くヘルメットを被った彼がいた。

まぎれもなく、彼だった。あの日と変わらない彼にほっとした自分がいる。満たされていく心に、私はすべてを悟った。

ああ、そうか。私が恋したのは、空色の自転車じゃなかったんだ。

私の初心な気持ちをつゆ知らず、慣れた手つきでチェーンを掛け直し終えた彼は、後輪を持ち上げ、シフトレバーをガチャガチャと切り替えながら動きをチェックする。

彼をサイクリングに誘ってみよう。いきなりすぎるのは分かっている。

ガチャン。

ギアのかかる音がした。

私の恋のケイデンスはどんどん数値をあげていく。